2024.6.14 配信

月刊 サンエスウォッチング

Vol.72-1

色と時代

今回は製品カラーから見る時代の変化についてのお題、あまりに古く遡ると彷徨って抜け出せなくなるので、1980 年代以降、今から 30 年前の 1994 年辺りからの当社基準の出来事を綴りたいと思います。

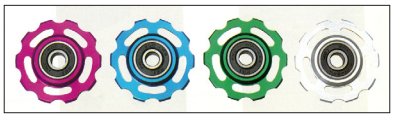
▶まず初めに、1980 年代前半、欧州ではツール・ド・フランスを頂点として使用されたロードレーサーが憧れであり、当社はビチュー、ピナレロ、バッタリン、デ・ローザ、ボテッキアなど多くの有名ブランドの国内代理店を行っていました。一方アメリカでは BMX やビーチクルーザーとは違った山走り(主に下り) の遊び自転車= MTB(ATB) が生まれます。(この辺りの話は Vol.38-39 でのチャーリー・カニンガムやトム・リッチーの稿で記述)
1980 年代後半からはアメリカ MTB の潮流は勢いを増し、弊社も GT、リッチー、KONA などのアメリカ&カナダ製品の国内総代理店を行なっておりましたが、欧州ではツーリングよりも依然ツール・ド・フランスを頂点としたロードレーサーが柱となり、パーツも斬新なものが生まれることもなくアメリカと相反するかの如く保守的な流れを歩んでいたと言えるでしょう。

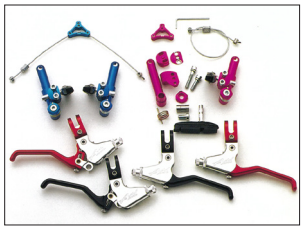
◀リッチーの代表的量産 MTB「P-21」は象徴となるトリコロールカラー
▼「ロジックロード」は渋いワインレッドを採用 (1994 年当時)

◀ 1988 年にペドロ・デルガドがツールで優勝し人気となったイタリアンレッドのピナレロ「モンテロ」この頃ピナレロではネオンカラーのスチール MTB フレームも存在していた

▶さて、色の話題で欠かせないのがこのアメリカ MTB の流れから起きたアルミパーツへのアノダイズド処理なのではないかと思います。特にアルミ自体の磨きやパープル・ブルー・レッドなどに処理されたカラーは魅惑的であり、人気の背景に世界的な 80 年代カルチャームーブメント=アメリカブームの影響もあったと思われます。当社も多くのアノダイズドカラー商品を扱い、塗装でもネオンカラーなどもありました。しかしこのビビットな流れは 1990 年代後半から落ち着いてきます。

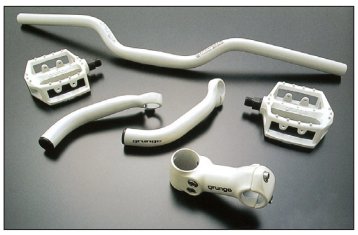
▲▼ステムで有名となったアメリカメイドのコントロールテックは3色のアノダイズドカラーを見事な色調で仕上げた





▲当時アメリカンブレーキの代表的存在のひとつであった CNC を駆使していたエイビッドはブラックもアノダイズド

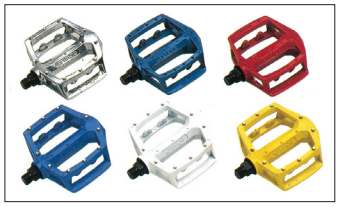
多くの流行を意識した輸入商材を扱い、画一化に倦(あぐ)ねる中で、MTB 系パーツのオリジナルブランド grunge(グランジ) を 1995 年に誕生させ、新製品のメインビジュアルとして当時無かったホワイト (ベタ塗り) ペイントのパーツを登場させました (Vol.33 にも掲載)。
生産工場は台湾の有名どころですが、白色は喪に服す色として嫌い、やめとけと断られたくらいでした。しかしこのホワイトカラーは当時 (暫くして) インパクトがあったようで、新生 grunge ブランドは色からも注目していただけるようになったのではないかと思います。



▲ 1996 年にアノダイズドに逆らうが如くグランジではベタ塗りペンキな白に拘り発表当初マーケットは無反応だったと記憶する

▶その後アルミへのペイントカラーも普通になり、ブラックを主に時流の保守化傾向の波は自転車パーツにも及んできます。しかし、当社としてはパーツの着せ替え感覚や、見た目だけでも楽しくなるとか、出来る限り色目を部分的にも残す努力を続けてきました。2000 年代にアップルがスケルトンのコンピューターを発表したのも、そんな時代だったと思います。只しかし、時代は益々保守化傾向に走り、パーツも殆どのブランドで黒ばかり、という寂しい時代がやってきます。その中でも何とかシルバーは維持したい、ということもあって、ハンドルなどもシルバーをラインナップし続けております。サンドなのかマットなのかポリッシュなのかソフトなのか、地味なところで個性を出すことに努力をし続けています。※但し、ロゴマークなどの表面的デザインについては今回話題から外させていただきました。

◀▼ 1998 年黄色いペイントを施した製品もあったり、原色の殆どを駆使していたのではと思うほど



次ページへ続く ➡